

「～出す」及び開始の意味を表す 後項動詞について

呉 美 善

単独の用法を持つ二つ以上の単語が結合して、新たに一語としての意味・用法を持つようになった「複合語」という造語パターンがある。複合語の構成にあずかる語は、名詞、形容詞、形容動詞、副詞、動詞など広い範囲にわたっている。また、複合した形にもほとんどの品詞が存在する。複合語において、独自の品詞性を持つのは後項要素であるので、「近づける」「息詰る」「思い出す」のように後項の要素が動詞であるものを「複合動詞」と称する。日本語学では狭義の複合動詞、すなわち、「動詞＋動詞」の形をその研究対象として取扱うことが多い。この場合、前項に用いられた動詞を「前項動詞」、後項に用いられた動詞を「後項動詞」とそれぞれ呼ぶが、複合に際して前項動詞は常に連用形の形をとる。

いろいろな動詞の連用形について広く複合動詞を構成する後項動詞の用法があることは、多くの学者から指摘されてきた。動詞が複合動詞の後項要素になると、単独で用いられるときの意味が稀薄になって前項動詞に付随的な意味を添える場合が多く見られるため、「助動詞」「補助動詞」「接尾語」などと呼ばれる場合もある。(注1)このような後項動詞は、多くの意味と特殊な用法を持ち、単独に用いられると基礎語に入るものが多い。後項動詞は複合して新たな意味・用法を持つ場合もあるが、ほとんどの場合その濃度の差こそあれ単独で用いられる時の意味を残している。このことは、後項動詞を論じる場合は単独で用いられる時の意味をあらかじめ理解しておく必要があるということの意味する。特に、幼少の時に日本語の基礎語の習得が行われていない外国人が複合動詞で何かを表現しようとする時、この必要性はさらに大きくなる。

前号では12種の後項動詞について、その結合する動詞を種類によって分け、構文論的な性質を探り、意味分類などを行った。考察を進めていくうちに、後項動詞間の類義語的關係が大きな問題点となってきたので、これからは一つ一つの後項動詞の個別的考察とともに、後項動詞間の類義語的關係をも言及していきたいと思う。本稿では、その一つの試みとして「～だす」を中心に開始の意味を表

す後項動詞の考察を行うことにする。

1. 「～だす」について

中側から外側、あるいは内側から表側への移動を表す動詞に「でる」と「だす」がある。「でる」は自動詞であり、移動するものは主体であるが、「だす」は他動詞であり、主体の動作・作用によって対象が移動する。すなわち、単独で用いられる時は、「でる」と「だす」を自動性・他動性で区別することができるが、後項動詞になると、「～だす」には本来の他動性をそのまま表すものと、「でる」のように主体自らの移動を表す自動性のものが存在する。そのほか、「～だす」はほとんどの動詞と複合して「動作・作用の開始」という意味を表す場合がある。この開始の用法は「～でる」には存在しない。

「だす」の意味は大きく「内から外に移す」(机を廊下に出す)、「隠れていたものなどを表に現す」(喜びを顔にだす)、「今まで無かったものを新たに生じさせる」(火事をだす)に分けることができるが、これらの意味を基本に「～だす」を具体的な例をあげながら次のように分類してみた。(注2)

1) 主体自らの移動

基本的な文型は「～から～に～して出る」で、「駆けだす、飛びだす、逃げだす、抜けだす、這いだす」などの例がある。

そのとき、だんちのはずれから、一びきの白い子犬がころころかけだしてくるのが見えました。(教2上)

「どうしたことだ。」じいさんは、小屋の外にはい出してみました。

(光5上)

他動詞「だす」が「～だす」の形で自動詞になって、主体の外部への移動を表す。ほとんどの場合「～でる」に言い換えられるが、次のように言い換えられないものもある。

被害地の視察にくり出す(くり出る×)者もいた。(教6下)

そして、父ちゃんのね入ったところで、そっと起き出して(起き出て×)、
子馬を待った。(光4下)

基本的に、「でる主体」「でる起点」「でて行く先」の三要素を持つのは「でる」と同じである。(注3) 主体としては、人間から、「鳥」のような生物、「矢」のようなもの、「言葉」のような抽象的なものまで用いられる。

「でる起点」は助詞「から」「を」で示すが、「から」に比べると、「を」はその使用範囲がせまく、主体が有情物である場合に限られる。(注4)

太郎はすぐ教室とび出してきました。(光3上)

「でて行く先」は、助詞「に」「へ」などで示す。

スーホは、はねおきると外にとび出し、ひつじのかこのそばにかけつけました。(光2下)

「おかえんなさい。」とさけんで、げん関へ飛び出していきました。

(光5下)

外部への移動の場合、だいたい内から外への移動であるが、「ある基準面(線)」から離れる方向にのびる場合もある。(注5) 内から外への移動の場合「でる起点」から完全に離れるが、この場合の「～だす」は「ある基準面(線)」から離れず、離れる方向にのびるだけである。

そのうちに、げっそりとやせこけたかおに、あの小さな目が、ゴムまりのように、ぐっととび出してきました。(教2上)

2) 主体が～して対象を外部に移す

この場合の「～だす」は主体の動作によって対象が起点から離れて外部に出されることを意味する。「選びだす、追いだす、吐きだす、運びだす、放りだす、呼び出す」などの例がある。

思い出したことの中から、書くことをえらび出す。(教3上)

童子は悲鳴をあげ、酒だるをほうり出してにげだしました。(光4下)

移動するものは対象であるが、前項動詞はその対象を外部に移す主体の動作を

表す部分になり、出す方法や様相などを示す。そのため前項動詞には、体の部分を使った具体的な動作を示すもの（投げる、蹴る、吸うなど）、道具を用いての動作（掃く、掘る、彫るなど）、言葉や身ぶりで対象を動かすもの（誘う、呼ぶ、導くなど）が前項動詞になる場合が多い。（注6）

「選びだす」「ほうりだす」のようなものの前項動詞は単に対象を外部に移す方法や様相を表すが、このほかに「持ちだす」「取りだす」のように前項動詞の動作が行われた結果の状態を対象が出される意を表す場合がある。（注7）これは前項動詞の動作の違いからくるものである。つまり、二つの段階で動作を分けることができるが、前項動詞の動作に「出す」動作が先行することはできない。「持つ」「つまむ」など、体、特に手に関係のある動詞が前項動詞としてよく用いられる。

「母さん、今日はこれだけさ、ほら。」と言って、ふえふきは、かごから具を取り出しました。（教3下）

みじかいもしゃもしゃの間から足にささった石をつまみ出しました。

（光2下）

3) 顕在化

「だす」には、「隠れていたものなどを表に現す」という意味があるが、「～だす」の形になってもその意味をそのまま表す、「思いだす、映しだす、書きだす、歌いだす、言いだす、描きだす」のようなものがある。

うすは、そのときそのときの人間の心持ちを、そのまま歌い出すものだよ。

（光6上）

先生がはったかみを見て、みんなは、きのうしたことをいろいろおもいだしました。（教2上）

内部に秘められて他の人、あるいは主体自身に感じられなかったものを感じるように顕在化する意味を表す「～だす」である。「映しだす」「書きだす」などは、顕在化されると主体以外の人でも感じることができるが、「思いだす」の場合は、感じることができるのは「～だす」の主体だけに限られる。これは、内部に

秘められたものを外部に出す方法などを表す前項動詞の性格によって左右されるが、「思う」は脳裏で行われる抽象的行動であるから他の人が感じとることはできないのである。現れる場合は、「スクリーンに映し出す」「カードに書き出してみる」のように、助詞「に」を以て示す。

このほかに、「見つける」「さぐる」「さがす」のように発見と関係のある前項動詞と複合して、主体が求めていたものをさがして発見するという意味を表す場合がある。

幼虫は、初めに、住まいのあなをほるときに、木の小さい根がある所をさがし出します。（教5上）

4) 無かったものを新たに出現させる

「だす」には「今まで無かったものを新たに生じさせる」という意味があるが、「～だす」にも内から外への移動が、結果として今まで無かったものを新たに出現させる場合がある。「生みだす、作りだす、造りだす、考えだす」などの例がある。

漢字と漢字とを結び付けたり、従来ある漢語を活用したりして、次々に、新しい言葉を作り出した。（光6上）

これは非常にきけんだったので、現在のよなベースが考え出されたのです。（教5下）

「発生」や「作成」とも言われたり、「創出」とも言われたりするものである。（注8）すなわち、無の状態からあるものを作り出すというところに重点が置いてある。また、この「～だす」は「顕在化」を表す「～だす」とは違って、普通現われる場を示す「に」をとらない場合が多いが、受身形になると「に」が現れることもある。

前項動詞は、無の状態から対象をどういう方法で作りに出すかを示す。実際の文の中では、「現在のよなベースが考え出された」のように、受身の助動詞「れる」が付いた形でよく用いられる。

5) 開 始

後項動詞「～だす」が補助動詞、接尾語、助動詞などと呼ばれるのは、単独で用いられるときの意味が薄くなった状態でほとんどすべての動詞について、前項動詞の動作・作用が開始するのを表す一面を持っているからだと思われる。1)～4)までの「～だす」の場合は、「内部から外部へ」という「だす」の基本的な意味をそのまま持っているので、補助動詞などと呼ばれるにはいたらない。他動詞「だす」に対立する自動詞としては「でる」をあげることができるが、「～でる」には「開始」という用法はない。

「～だす」は前項動詞の動作・作用が継続的に行われる場合、あるいは反復動作や多数の主体によってなされる連続動作の場合は、開始の意を帯びる。(注9)「歩きだす、動きだす、歌いだす、泣きだす」などがある。

そうして、「ころころころりんすっとんとん。」とうたいながら、おどりだ
しました。(光1上)

シグナルが青に変わると、たくさんの車がいっせいに走りだしました。

(光4上)

開始ということが認められるためには、前項動詞の動作・作用はある期間中続いて行われるものでなければならない。つまり、「開始—継続—終了」という時間的経過を有するものでなければならない。このような条件を満たすものに「継続動詞」と呼ばれるものがある。金田一春彦氏は日本語の動詞を「状態を表すもの」「継続動詞」「瞬間動詞」「ある状態を帯びることを表すもの」の四つに分けているが、その中で「継続動詞」は、「～ている」をつけると、その動作・作用が進行中であること、すなわち、その動作・作用が一部行われて、まだ残りがあることを表すものである。

一方、動作・作用が瞬間的に終わってしまうことを表す瞬間動詞の場合にも、「開始—継続—終了」の時間的経過を有する次のような「くりかえし」というものがある。

ちくちく、ちくちく、いたみだす。(光5下)

瞬間動詞の「くりかえし」について、吉川武時氏は、「いくつかのある同じ動

作・作用が適当なインターバルで時間の経過にそってならんだもの、これを一つの過程とみなす」と述べている。(注10) この場合の「～だす」は、同一主体による「くりかえし」の動作・作用を表している。そのほかに、同一主体の場合になると瞬間的な動作・作用を表す「見える」「咲く」のような前項動詞も多数の主体によると、連続的な動作・作用になり、「開始—継続—終了」の時間的経過を持つ。

もう少ししたつと、春の空の色と同じ色をしたいぬふぐりの花もさきだすよ。

(教3上)

ぬま地にやってくるガンのすがたが、かなたの空に黒く点々と見えだしました。(光5上)

例文の「いぬふぐりの花」と「ガンのすがた」は、形は複数ではないが、複数の概念を帯びているものである。

以上のように「～だす」の意味は、単独で用いられる時の「外部への移動」「顕在化」「発生」という意味を表すものと、「動作・作用の開始」の意味を表すものとに大別することができる。文の中で用いられた「～だす」がどちらに属するものであるかは、伴う助詞(「外部への移動」の「～だす」は基本的に「～から～に～だす」というパターンが考えられる)などによって判断することもできて、外国語として日本語を学ぶ時、さほどむずかしくはない。外国人学習者が理解しにくいのは類似した意味を持っている後項動詞の使い分けのほうであると思われる。まず、「～だす」で問題になるのは、「開始」の「～だす」とそれと類似した意味を表す後項動詞との使い分けである。次に、それらの相違点について検討してみよう。

2. 「開始」の意味を表す後項動詞

「開始」の意味を表す「～だす」と類似した意味を持つものとして「～はじめ」「～かける」などがあげられる。

1) 「～だす」と「～はじめる」

「～はじめる」と「～だす」は多数の共通した前項動詞を持つが、それだからといって、両方の意味と用法がまったく同じとは言えない。この二つの相違点については次のような指摘がなされている。

「～だす」は無の状態、現れていない状態のものがおのずと顕在化し、動作・状態の変化として形をなすという意が強い。(森田良行)(注11)

～ハジメルと～ダスは多く同一の動詞に付き、意味も殆んど変わらない(e.g. 雨が降りハジメタ; 降りダシタ)が、～ダスのほうが自然的現象を表わす色彩がより強い。(寺村秀夫)(注12)

理解のために、具体的な例をあげながら「～だす」と「～はじめる」の相違点を考えてみる。

「～だす」は、「とつぜん(に)」、「直ぐに」、「跳ねるようにして」「急に」「にわかに」「いきなり」「いっせいに」などの修飾語句をよく伴うが、これは「～だす」の表す「開始」が突発的で急なものであるのを表す一面である。

とつぜん海があれだしました。(教3下)

二人とも、にわかに泣きだしたようじゃ。(教6下)

一方、「しだいに」「ゆっくり」「静かに」のような修飾語句とともに用いられて、動作・作用の開始が緩慢であることを表す場合は、「～はじめる」のほうが適当である。

が落は退屈を感じ、しだいに息詰りはじめていた。(芝木好子、「湯葉」)

馬は首を大きく上下にふり、馬車はゆっくり動きはじめ、駅の正面へまわりこんできた。(辻邦生、「見知らぬ町にて」)

「～はじめる」はある動作・作用が開始されてしばらくその状態が続くことを表す。そのために、ある動作・作用が進行中であることを表す「～ている」というパターンが使われることが多い。

新たに活動しはじめている病巣を映しだしてました。(大原富枝、「ストマイつんぼ」)

……路上の汚物のように扱いはじめているのに気がついていない。(瀬戸内

晴美、「夏の終り」)

これに対し、「～だす」は開始するその時点に重点が置かれるために、動作・作用が行われる直前を表す、次のような表現が可能である。

船が動きだす間際に、彼は浩に、どうしたか聞いたようだった。(小川国夫、「アポロンの島」)

なきだしそうなこえて、チックとタックがさげびました。(光1下)

「～だす」は外部の力とは関係ない自然発生的表現に用いられる。「ひとりでに」、「思わず」のような修飾語句を伴ってその動作・作用の開始が自然発生的であることを強調することが多い。

千枝子の足は毎日船の着くところになると、港のさん橋の方へひとりでに歩きだしました。(光6上)

ほんとにわたしは思わず笑いだしてしまったのです。(大原富枝、「ストマイつんぼ」)

次のように、何か目的や願望、意志があつての動作・作用の開始には、「～はじめる」のほうが適当である。

……私の方に近づこうとして動きはじめ……。 (辻邦生、「見知らぬ町にて」)

東京の湯葉商のどこもまだ取りつけていないモーターを取りつけたいと露は思いはじめた。(芝木好子、「湯葉」)

「はじめる」には「いつもの行動を行う」「いつものくせを出す」という意味があるが、後項動詞になってもその意味が表される場合がある。

それでもなんでも、また秋が来て、きりの葉が、ハタリホタリと落ち始めると……。 (教5上)

マロニエは八月のなかばから下葉を落しはじめ……。 (なだいなだ、「帽子を……」)

のような場合はもちろんのこと、「鳴く」のように普段は「～だす」に複合しやすいう前項動詞でも、単なる叙述ではなく、「いつも」「例のごとく」のようなニュアンスを帯びる時は、「～はじめる」のほうがふさわしい。

あの子は山鳩が鳴き始める頃になるときまって唄をうたひ出したものぢゃ。

(加藤道夫、「なよたけ」)

以上のように、「～はじめる」と「～だす」の相違点を考えてみたが、その相違点は単純語の意味の違いに起因するのではないかと思われる。つまり、「はじめる」はある一定の時間的経過を有する動作・作用の開始という意味があるのに対して、「だす」は「隠れていたものなどを表に現す」「今まで無かったものを新たに生じさせる」のような事柄の発生という意味を持つ点が異なると言えよう。

2) 「～かける」

「かける」はそれ自体では不安定な状態にあるものを他のものを支えとして安定な状態にもっていくという意を表す。そのため、「かける」は、不安定な状態にあるものと、安定な状態にもっていくのに支えとなるものとを必要とする。「かける」は後項動詞「～かける」になると、ある動作・作用が特定の対象に向けられる「指向」の意味を表したり、前項動詞の動作や状態に入りはじめたという「開始」の意味を持ったりするが、「開始」の意味を表す「～かける」は動作・作用が向けられる対象を前提としない。では、「開始」を表す「～かける」はどんなものであるかを「～はじめる」、「～だす」と比較しながら検討してみよう。

「～はじめる」、「～だす」は、「開始—継続—終了」というような時間的経過が考えられるものに複合するという特徴を持っているため、いわゆる「継続動詞」に最も付きやすく、「瞬間動詞」に付く場合は、「くりかえし」の動作・作用、あるいは多数の主体による動作・作用に限られる。これに対し、「～かける」は複合する範囲が広く、「継続動詞」にも「瞬間動詞」にも付く、まず、前項動詞が「継続動詞」である場合から検討してみる。

佐々木が言いかけたとき、ふたりは庶務課の前まで来ていた。(河野多恵子、「幼児狩り」)

おもい心で、かれは、かべのあなへもどりかけた。(教2下)

このような「～かける」は、前項動詞の動作・作用がはじまって途中まで行われたことを表す。「～かける」が「～はじめる」や「～だす」と違うところは、上のような単なる開始の用例からはわかりにくいですが、次のような場合はどうであ

ろうか。

「リ、リー。」と、しのちゃんは言いかけましたが、みんなどっとわらったので、目になみだをためて下を向いてしまいました。(光3上)

うら口からのぞいてみますと、兵十は、昼飯を食べかけて、茶わんを持ったまま、ぼんやりと考えこんでいました。(光4下)

「～かける」の表す開始は、いちおうある動作・作用がはじまって、途中で中止が行われる場合が多い。森田良行氏は、

「食いかける、乗りかける、飲みかける、読みかける」と辞書形はあまり使わない。「……かけて……する」「……かけていた」の形をとるのも、意志でコントロールできる状態だからである。(注13)

と指摘しているが、「……かけて……する」「……かけていた」という形がよく使われるのは、「～かける」の表す開始が途中で中断し、その後、前とは違う状態が生じることが多いからであろう。また、その中断は、主体の意志でやめることもできるし、後で元の状態にもどることもできるものであるが、その中断の要因は主体自体の意図というよりは、他のこと、あるいは他の何ものかによる場合が多いようである。(注14)

次の相違点としてあげられるのは、「瞬間動詞」との複合である。

それにしても、死にかけている、とはどういうことであろう。(三浦哲郎、「恥の譜」)

刀身は腐りかけた魚腹のように、きらりと鈍く光った。(田村泰次郎、「蝗」)

瞬間動詞が前項動詞になると、「～かける」は前項動詞の動作や状態に入りはじめたということではなく、その前項動詞の動作・作用が行われる寸前の状態に達したことを表すようになる。

「～はじめる」、「～だす」、「～かける」の三つを主体の意図という面から考えてみよう。「～はじめる」は、人間の意図によって行われる行動を表す表現に用いられることが多いが、「～だす」は意図とは関係のない叙述の場合が多く、「～かける」は意図してない、反意図の結果になることが多いようである。

本稿では、前号にのせた後項動詞の個別的考察を補う意味から、類似の用法を

持つ後項動詞間の比較をも加えて、「～だす」及び「開始」の意味を表す後項動詞について考察してみたが、日本語が母国語でないがゆえに、日本語独特のニュアンスなど、日本人なら基本的に習得しているものの欠如などがあり、論をすすめるにおいて無理が生じた面もあると思われる。この点、みなさんのご指導をお願いしたい。

注1：金田一京助氏は、半ば助動詞化しているものに、時枝誠記氏は用言的接尾語に、佐々間鼎氏は準助動詞に、林和比古氏は補助用言の範疇に入れている。

注2：「教」は教育出版、「光」は光村図書の小学校の教科書である。その他の例は筑摩書房の現代日本文学大系の中からとった。

注3：森田良行。『基礎日本語1』

注4：姫野昌子。「複合動詞「～でる」と「～だす」」。日本語学校論集4号

注5：宮島達夫。『動詞の意味・用法の記述的研究』

注6、7：注4に同じ。

注8：森田良行氏は「発生」「作成」と、姫野昌子氏は「創出」とそれぞれ呼んでいる。

注9：注3に同じ。

注10：「現代日本語動詞のアスペクトの研究」。『日本語動詞のアスペクト』

注11：注3に同じ。

注12：「活用語尾・助動詞・補助動詞とアスペクト」。『日本語・日本文化』
(1969)

注13：注3に同じ。

注14：注10に同じ。